企業のITスキルで高齢者のハガキづくりを支援

SOC株式会社は札幌市厚別区に本社を置くシステム・アプリケーション開発を行う会社。積極的に自社で障がい者雇用を進め、地域社会に貢献する企業を目指しています。SOCでは老人保健施設「ディ・グリューネン」で地域・社会貢献に着手し、パソコンで暑中見舞をつくる講座をひらきました。

▲暑中見舞ハガキづくりに参加したみなさん

▲厚別区の「ディ・グリューネン」

高まる高齢者のITへの興味と関心

SOCは札幌市では厚別区と白石区に社屋があり、今回は厚別の本社で取り組みました。担当するニュービジネス部には業務を通じて、障がい者にITを教える講座の運営スキルがありました。このスキルを活かし、SOCでは地域・社会貢献をと考え、札幌市市民まちづくり局が平成26年度に行った「企業の地域・社会貢献活動コンサルティング」事業に応募。コンサルティング支援を活用し、専門家とSOCが面談を重ね、活動内容を共に検討して準備しました。

活動は、高齢者を対象に小さく始めることとしました。実施に当たり、市内のボランティア関連情報が得られる札幌市ボランティア活動センターに活動先を照会。ディ・グリューネンを打診され、施設を実際に訪問して企業側の主旨を説明、施設側はSOCの申し出を歓迎しました。施設では、普段行うリハビリプログラムにはITを使ったものは少なく、今後ITを使った内容も増やしたいと考えていました。講座の運営も個人ボランティアが中心で、企業側からの参画の声は、今回が初めてでした。

▲初めてのPC操作

▼IT講座の翌日に行った社会貢献「全日本車椅子ソフトボール選手権大会」(2015年7月4・5日:企業協賛)

施設側のニーズとSOCが得意とするスキルが合致したIT講座を行うことに決定。利用者が自分で暑中見舞ハガキを作成し、印刷する内容としました。

初めてのパソコンに達成感

夏の日差しを感じる平成27年7月3日(金)の午後、SOCから3名が施設を訪れました。多くの人が集まるデイケアフロアを使い、ノートパソコンを5台用意し、小さなIT講座「暑中見舞ハガキづくり」を開催しました。講師の社員がレジュメを使いながらゆっくり話し、暑中見舞をつくる流れを説明。マウスやキーボードを使い「マウスは人差し指をふんわり添えるように持つといいですよ」とコツを説明し、ディ・グリューネンとSOC双方のスタッフが、参加者に個別に付き添い、操作を見守りました。参加した4名の高齢者は全員が初めてパソコンを使う人で、家族全員の名前を差出人欄に打ち込む姿や、画面を指して質問する熱意が見られ、各自が作業に集中しました。

金魚の絵柄がカラーで印刷されると、参加者は達成感でパッと笑顔に。「いい顔してるねYさん」との声が職員からかかり、各人が満足そうにハガキを3枚5枚と印刷し、持ち帰りました。「レジュメの用意や、各人の理解度に応じた教える工夫があって、運営する際の参考になりました。印刷したハガキを持ち帰る成果が見える内容で、利用者様に喜んでいただけたことがよかったと思います」(施設側の担当者談)

「一般のIT講習とは勝手が違い高齢者ですので、全体を見ながら個別の支援など臨機応変に対応しました。施設の職員さんは普段から意思を通わせておられるため、参加者の困っていることに早く気づけました。今日のようなIT講座のやり方であれば、高齢の方にも満足を頂ける印象を受けました」(SOCの講師社員談)

SOC今後の地域・社会貢献

SOCが持つスキルを活かし小さな場の運営を心がけ、講師のみならず施設職員もサポートし、高齢者が初めて触れるパソコン操作をマンツーマンで補助できた点が、今回の成功要因でした。パソコンやスマートフォンを使った講座が今後、継続して開催されれば、施設を利用する人たちのITへの関心をひき出す機会がつくれます。

「施設の職員さんも主体的に加わって頂き、多くの利用者の目に止まる場所で開くことで、ITを身近に感じていただけてよかったです」(SOC担当者談)。「今回の支援を大変ありがたく思っています。今後も協働でこうした催しが開けたらいいですね」(施設担当者談)。

ディ・グリューネンの活動を終えた翌日、SOCは千歳市で開催した「全日本車椅子ソフトボール選手権大会」に向かいました。SOCでは企業協賛として模擬店を出店、障がい者スポーツの振興という社会貢献にも汗を流しました。高齢者や障害者への支援に、SOC株式会社では今後も機会を捉え、身近な地域・社会貢献活動を続けます。

成功の秘訣

会社の強みを活かした無理のない活動

情報処理サービス

SOC株式会社

札幌市厚別区下野幌テクノパーク
従業員数:312名

技術支援　■福祉